

民報 ゆうばり 旧校舎の活用で就労支援

雇用の充実・拡大で安心して住み続けられる夕張を？

夕張市が財政破綻後人口1万人を切る中、閉校した旧幌南中学校の委託事業活動を開始している一般社団法人ぱれっとふぁーむを取材しました。(施設前景)



◆ ◆ ◆ ぱれっとふぁーむの 事業とは？

就労継続支援 A 型・共同生活援助事業という障害福祉サービス事業所のことです。おもに知的障害者の定員20名の施設。法人は2011年5月に設立し、2

012年4月北海道の指定を受けました。同年5月臨時市議会での校舎やグラウンドの貸与について承認の議決を得た後7月正式に開所式を済ませました。

就労支援の 利用状況は？

総施設長(管理者)古崎靖宏氏は一般的にそこで働いている人を施設利用者と呼んでいるが、ふぁーむでは職員という呼び方をしている。管理部門はスタッフという呼び名でつかいわけている。現在の知的障害者は15名、精神的障害者4名を含んで19名と説明してくれました。

通勤については送迎をし、土、日など作物の水やりなどでは交代で行っている。月々金までの昼食は外注の弁当を届けてもらい、それ以外は調理のスタッフが調理している。

事業の内容は？



農産物・野菜を中心に置いて、ホウレン草・いちご・きゅうりなど30品種程度を考えている。これまでホウレン草を栽培したが、売り物にならなかつたことや農産物を育てる技術指導を含めてもつと研究しなければならぬと話してくれました。現在、職員たちは冬もハウス栽培ができるようにいちごの育苗や土づくりに励んでいます。(育苗・土づくり)

販売先は？

販売先は本州の会社と契約しているが、これまで収穫したものは発送していません。

地域との連携は？

学校が地域との連携の場であったように、交通安全運動や盆踊り行事などで参加したりしているがもっと連携を深めていきたいと考えている。体育館は時たま子どもが遊びに来ている。けがのないよう安全に気をつけるよう話している。

【取材を 終えて】

取材の申し込みアポの件で電話帳を確かめたのですが、掲載されていないと直接

卒業生などが訪問して来ることもあり施設はほとんどそのままにしている。

お会いすることになりました。施設管理者古崎さんには、快く取材にに応じていただき、校舎の活用状況などを端的に説明し、施設内の案内をしてくださいました。また、校舎外で職員が懸命に・生き生きと土づくり作業に従事している姿やグラウンドに頑丈なハウス2棟が建てられているのを見て、就労事業の本格的な成功を見守りたいと感じました。



(2棟のハウス)

後援会リンゴ狩りと温泉 交流会のご案内

リンゴ狩り・焼き肉、温泉も！！

とき：2013年10月26日(土)

ところ：石黒リンゴ園、ユニの湯

会費：500円(焼き肉・入浴込み)

※おにぎりとお飲み物各自持参

※参加連絡は担当者まで(送迎バス有り)

090-9755-2586(相馬)

080-5593-9610(安部)

しまが桂子の 結核日記



日本共産党 夕張市議

くまがい桂子

韓国でも『住民自治』

10 月初旬、SBS（旧ソウル放送）からインタビューの申し込みがありました。

さて、インタビュー当日、この番組はソウル大学との共同制作で、「中田市政はワンマン・トップダウンで、他からの意見を聞こうとしなかったことも、破たんの原因の一つと聞いている。今、韓国でも同じような自治体の問題となっているため、現在の夕張市の状況、民主主義・地方自治・情報公開・首長と住民との対話等について話してほしい」ということでした。

そこで、「当時は国の大きな政策転換の中で、三セクの決算状況も公開されず、借金の額も闇の中だったことが巨額な赤字の原因の一つにもなった。

現在は、『市長とのふれあいトーク』や、市民 5 人以上が集まれば『市長と話し合う会』、また、市民参画の協議会・検討委員会などが設置され、議会も各種の懇談会を開催し、市民の要望を聞く機会を何度もつくっている」こと等をお話ししました。

最後に「住民の側からの自治について、どう考えるか」という質問。とっさに「権力者が勝手に決めて上から押し付けるのは、自治ではなく統治。民主主義は住民が生活の中から問題点を出し合い、行政と住民が話し合いで解決、実現させていく『住民自治』が大切ではないでしょうか。」とお話しすると、笑顔で OK サイン。

まさに、「地方自治は民主主義の学校」です。巨額な代償を支払って得た夕張市民の『住民自治』は始まったばかり。財政破たんの責任と分担を明確にするのはこれからです。



日本共産党 准中央委員
道政策委員長

島山 和也の

「かけある記」

「団結こそ力」

本格的な秋ですね。私の子どもたちが通う保育園の運動会は、三年連続で雨のため体育館でしたが今年は青空の下で！ やっぱりで駆け回る子どもたちの姿を見れるのは嬉しいものです。

二歳の息子は、登った戸板からヘッドスライディングのように滑って下りました。学童リレーに参加した小二の娘は「いつの間にかこんな早く？」と驚くほど、グラウンドを駆け抜けました。それぞれの成長の早さに、目を奪われた一日でした。数日後、福祉・保育現場で働くみなさんとの「つどい」に参加しました。子どもたちや障害を持つ方々と接する喜びとともに、だからこそ労働現場を良くしてほしいと意見が続きました。「職場は半分が非正規。若い人たちがかわいそう」「少ない人数で疲れ果て、腰痛を訴える人も多い」「早く仕事が終わればなあ」と時計を見る」など、切なくも率直な思いを聞きました。

保育園でも学童保育でも、「子ども時代」にしか体験できないことを保障しようと一生懸命です。福祉や介護の現場でも「人と人との関わり」が大事にされています。現場を一番そばにしているのは、政治の方ではないのでしょうか。「うちの職場もブラック企業みたい」と発言された方もいましたが、今の安倍政権こそ私は「ブラック政権」と言いたい。

一人ぼっちの仲間を声をかけて団結しよう——これが「つどい」の結論となりました。安倍政権の暴走を許さない反撃